

## 第5回義務教育に係る政策研究会（概要）

- 1 日 時 平成18年6月13日（火） 午後2時～4時10分
- 2 場 所 ルビノ京都堀川（加茂の間）
- 3 配付資料 別添のとおり
- 4 概 要 「土曜日の有効活用について」

### 【事務局説明】

- 「第3・4回での土曜日の有効活用に係る議論の整理」について【資料1】
- 「平成18年度休業土・日曜日における学習活動」について【資料2】
- 「地域子ども教室」に関わる国の動きと「府内の体験活動等の状況」について【資料3・4】

### 【意見交換】

- ・ 資料1の「議論の到達点」に、「子どもや保護者のニーズに応える興味・関心に応じた学習や体験活動の機会を提供する・・・」とある。確かに現在の社会教育には、地域や保護者の「要求課題」に応えるという側面がある。しかし、例えば中学校の場合、進路指導をしていくという「必要課題」もある。そうすると土曜日の有効活用を考える上で、100%保護者や子どものニーズに応えるものにはなり得ないと思う。やはり「要求課題」と「必要課題」を併せて考える必要があるのではないか。
- ・ 子どもたちの居場所づくりについては、こうあるべきという型にはまった形でこれまで進められてきたのではないか。確かにその中でも、子どもは楽しく過ごしてはいると思うが、自らもっと積極的に様々な取組を行いたいと思っている子どもが、果たして何人いるのだろうか。  
他府県では、土曜日の活用方策として、子どもたちは自由な発想で自分たちのやりたい活動を行い、大人はそのサポートにまわるという取組が行われていた。基本的には、子どもたち自らが何かを感じて取り組み、大人がそれをサポートする。それが本来の子どもたちの居場所づくりではないか。その辺りをPTA、保護者、地域も考えていかなければいけない。
- ・ 資料1にある「子どもが集まった中で枠は決まっていく。そのため、子どもの取り合いをするのではなく、子ども自身がきちんと選択できるようなシステムづくり」のためには、大人がサポートする体制が重要である、と認識する必要がある。
- ・ 国の「放課後子どもプラン（仮称）」における「放課後」という言葉は広く解釈してよいのか。平日の放課後だけに限定されるのか、それとも土曜日なども含むのだろうか。

(府教委)

- ・ 文部科学省が実施している「地域子ども教室推進事業」と厚生労働省の実施事業を合体させるということで、放課後だけでなく土・日曜日、夏休み等の長期休業期間も含めて考えられているのだと理解している。
- ・ 資料2「土・日曜日における学習活動」の実態として、学校では漢字検定等が中心的な取組になっていると思うが、それはいわば学校の特色づくりとか学習意欲を高めるためのものであると思う。また、それらの取組は、通常の国語、算数等の授業の中で実施することが難しいため行われている部分もあると思う。  
対象を土、日曜日に限定すれば数は少ないが、夏休みなど長期休業期間を含めたならば、様々な形での国語、算数等の補充学習等が、実際にはもっと幅広く行われていると思う。
- ・ 中学校ではほとんどの子どもが部活動に加入しているが、残りの子どもたちは土曜日をどのように過ごしているのかと問いをめぐらせた時、今の子どもは、自分の将来の夢や、やりたいこととかを考えながら毎日を暮らしているのだろうかと考えてしまう。  
小学校高学年からは、その辺りの知識をつけ始めてもよい時期にあるのではないか。そうすることによって自分のやりたいこととか、今何をしなければならぬか等が子どもたちにも見えてくるのではないか。そしてそれに対しては家庭においてサポートしていくことが大事だと思う。
- ・ 子どもたちがこれからの人生の生き方を確立すべき時に、将来への前向きな意識をいかに持ってもらうかは非常に重要だと思うし、家庭にはもちろん地域をも含めて考えてもらう必要があると思う。
- ・ 例えば資料4の体験活動のネーミングを見ると、学習活動に焦点を当てている感じのネーミングのものとそうでないものがあるように、望ましい土曜日の活用方策を考えるとき、学力保障の観点から土曜日の在り方を組み立て直すという方向と、幅広く体験をしながら地域と交流していくという方向によって議論の仕方が変わってくると思う。
- ・ 土・日曜日における学習活動については、小・中学校で事情が違う面があると思う。資料2によると中学校の場合ほとんどが教科学習に関する活動である。土曜日の有効活用への重要な視点の1つとして、中学校ではそういう視点も成り立つのかなという印象を受けた。
- ・ 数が少ないとはいえ、中学校における取組の内容からある程度現場のニーズを感じとれるのではないか。  
ネーミングについては、府教委は何か掴んでいるか。

(府教委)

- ・ 特にネーミングの調査はしていないため、把握していない。
- ・ 学校週5日制の趣旨の中には、休業土曜日に家庭・地域が子どもにどう関わっていくか、また、そのために学校がどう関わっていくかということがあったと思う。しかし、現状では、中学生はほとんど部活動に費やしており、土曜日の中に学びや体験をどう取り入れていくかは大きな課題であると思う。

土曜日を学力や生きる力をつける時間にどうやってしていくか。部活動だけをすればよいのか、ということについては議論していく必要がある。

- ・ 小学校の場合、授業に準じた形の土・日曜日の学習活動を行うことは非常に困難ではないか。希望者が出なかったり、一部の児童生徒だけしか参加しなかったりした場合も考えられ、問題があると思う。  
土曜日には、学校で学んだことの延長としての体験的な活動をするのが良いのではないか。理科で花の勉強をした後に、実際に咲いている場所に見に行く等、自分の興味等を中心にして活動していくということができないだろうか。
- ・ 学力低下が言われるようになってから、学力の充実ということが矢面に立つが、土曜日の取組を考える上では、教育改革の一環である学校週5日制の趣旨も常に意識しなければいけないのではないか。
- ・ 土曜日の有効活用について、それが学校の5日間の教育活動に影響を与え、土曜日にも学習活動をするから平日の授業はあまり頑張らなくてもよい、という逆転した発想を生んではいけない。当然のことだが、学校の教育活動をきちんと行うことが前提の上で土曜日をどう過ごしていくかという議論をする必要がある。
- ・ 我々が土曜日について考える時、すでに土曜日は部活ありきという意識に陥っていないだろうか。学校週5日制の趣旨からすれば、部活動はあくまで土曜日の過ごし方の選択肢の1つである。土曜日は部活動があるからといってそこを別扱いにして考えてしまうと、議論の方向を誤るのではないか。  
土曜日の過ごし方のメニューとしては、学習的な活動もあるし、体験的な活動もある。例えば、「教科学習活動」「スポーツ体験活動」「文化体験活動」などといった活動が考えられないだろうか。
- ・ 子どもの土曜日の過ごし方を考える上で一番大事なことは、全く参加意識がない子どもの目をどうやって様々な活動に向けさせていくのか、ということだと思う。今、人と交流したり話したりすることがものすごく苦手な子が多い。自分のペースでやりたい、人に言われてやりたくない、という考えの子どもたちをどうやって振り向かせるかが大きな課題だと思う。
- ・ 子どもたちの土曜日への積極的な活用意識をどう引き出すか、ということは非常に大事なことである。学校・家庭・地域がどのように関わっていけば子どもたちの自主性を引き出せるのか、またそれを発展させればどんなシステムができるのか。条件を整え、物を整備したからといって人の心が動くわけではないと思う。
- ・ 以前、小学校に高校生が来て子どもにお絵かき等様々なことを教える取組を見たことがあるが、そこでは子どもたちがいきいきとしており、その高校生たちをなかなか帰そうとしなかった。何か特別なことをするわけではなく、ただ一緒に遊んでいるだけなのである。やはり大人だけでなく、高校生など若い世代もその下の子どもの世代に関わることが必要なのではないだろうか。
- ・ 資料では小・中学校で土曜日に学習活動を行っているのは約350校中15校だけである。子どもの取り組む気持ちを引き出すには、やはり学校がもっと本気になって、7日間ト

ータルで子どもたちに力を付けていくことが大事である。学校は地域のセンター的な役割として、地域の力を借りながら工夫して取り組まないとだめだと思う。

その取組は漢字検定等だけに限ったものでなく、教科の力に繋がっていくような体験活動等も含めたものが考えられる。

- ・ 学校を本気にさせるシステムとして、例えば、大量に団塊の世代の教員が退職するが、再任用という制度を活用して、土曜日に学校へ派遣し、核となるような仕事をしてもらう取組はどうだろうか。PTA・学校とともに、取組の中身について一緒に考えてもらえればと思う。
- ・ 土・日曜日に学校が学習活動を実施するには、思いを持っているかどうかの他に、必要性の有無、実施する条件が整っているかどうかの問題が関わってくる。資料2に表れている数字以外にも、休業土曜日に体験活動など広い学習のすそ野に当たる部分の取組は多く行われていると思う。
- ・ 議論の整理として、土曜日の活用方策を考える上で学習活動に限定し、これを広げていくにはどうしたらよいかという観点で考えるのか、それとも学習活動をも含んだ幅広い体験活動を広げていくにはどうしたらよいかと考えるのか。その辺についてある程度方向性が定まらないと、議論が深まらない。

(座長)

- ・ 土曜日を中心にした休業日の過ごし方については、これまで実践されてきた様々な取組があるが、それを見直す中でさらにどういう取組が考えられるか、という幅広い方向での議論をお願いしたい。学習活動については、大枠の議論の中で出てきた視点の1つと理解している。
- ・ 土曜日の様々な体験活動は、これまで自然との触れ合いや地域性のある活動を中心に進められてきた。当然それらは子どもたちに生きる力をつける上で有効な取組だと考えられているが、その実績の上に、さらに何が考えられるかを議論していく必要がある。
- ・ 「義務教育に関する意識調査」(文部科学省)の中で土曜日に求められていることについて、教科学習の充実を望む保護者と、そうでない教職員の意識に大きなギャップがあり、それを埋めていく方向の議論が必要である。
- ・ 義務教育においては1年間365日の中で165日が休みのため、授業日数は200日を確保できるかどうかである。それは規則で決まっているため他の日に正規の授業を行うことはできないが、教育「的」活動として教科に関わるおもしろ教室といった取組を工夫して行うことも手法として考えられる。そこでは子どものニーズを満たすだけでなく、子どもにこんなことを身に付けさせたいという思いが十分に伝わるような活動が必要だと思う。  
一方で、子どもの居場所を提供するとき、安心安全の観点から、居場所を確認するという作業も併せて行っていくことが重要である。
- ・ 今、あまりにも地域の中で学校へと期待が集まりすぎている。夏休み等長期休業期間中に授業を行えば保護者は喜ぶかもしれないが、子どもを見る役割を学校に一極集中さ

せる方向に進むと、勉強できる、できないという価値観で子どもを見てしまい、教育改革の精神から逸れていくのでは、と不安である。やはり、学校・家庭・地域それぞれが果たすべきことの中身もしっかりと考えていくことが大事である。

- 学校は義務教育として、地域における学校教育をどうしていくのかを考えなければいけないが、学校週5日制の中では、当然それは5日間で完結させるものでなくてはならない。しかし、これからは人間教育という観点で、5日間を軸にしながらも残りの2日を加え、1週間トータルで子どもをどう育てていくかを考えていく必要があるのではないかと。
- 併せて、学力観や伸ばそうとしている社会的資質や体力観を少し広げて考えていく必要がある。土・日曜日2日間も視野に入れた学校・家庭・地域の協力体制が求められていると思う。
- 学校週5日制になったときに、従来との違いを打ち出すために土・日曜日は家庭や地域へ、ということで、学校からの切り離しが非常に強く言われたが、教育の専門家のいる学校がその2日間についても様々な形で関わっていくことの意味はあると思う。学校に通わないのであれば学校と違う活動をしたらどうか、ということで、体験を始めとする様々な教育活動が重視されてきたが、改めて見直したときにもう少し何か付け加えられる要素があるのではないかと。
- 資料3にあった、現在国において考えられている施策は土曜日等も含んだものと聞いたが、土曜日の活用を考える上では、国の施策の方向との関連についてもどう捉えていくのかを考えておく必要があると思う。そうすると土曜日だけを議論の対象にしているよいか、という問題も出てくる。
- 土・日曜日の取組に関し、これまでなかった視点としては、学力の問題も視野に入れた何らかの戦略を踏み込んで考えることである。昨今、勉強、勉強、と言うことがタブー視されてきた面があるが、学力低下についてここまで世間の関心が高まれば、学力の問題は避けて通れない。  
5日間でできないことについては、土・日曜日に、様々な人的、物的資源を使いながら、学力向上につながるような仕組みを考えるというのは非常に大事な観点だと思う。学校週5日制になって様々な実践が行われてきたが、それらが全てうまくいっていれば、今こんな議論はしていない。
- 土曜日の施策を考える上で、誰が主体的に実施していくか。教育委員会かそれぞれの学校か、あるいは地域か、という問題がある。施設は学校を中心とし、対象者は義務教育段階の児童生徒というイメージはあるが、主体をどこにもっていくのか。この観点が抜けているのではないかと。
- 例えば、学校での土曜日の過ごし方として、企画プランを公募し、良いものに対しては資金を手当するというようなコンテスト型での実施も考えられる。その結果についてはきちんと評価をし、うまくいけば府内全体に普及させていく。こういった仕組みも1つの案として考えられるのではないかと。
- 社会教育と同様に学校教育においても、土曜日に府内の全学校が独自の取組を行う様になれば、教育委員会は土曜日閉庁してよいのかという問題が出てくると思う。

時代の流れや家庭・地域の願いがあれば対応していかなければいけないと思うが、財政的に苦しい時期に、土・日曜日が稼働していけばプラスの財政措置が必要になるという大きな課題をも抱えることになる。

- 例えば、土・日曜日においてコミュニティ・スクールの運営をするというところがもし出てくれば、地元におられる教員免許状をもった方に、指導者としてお世話になるということも考えられる。ただ、全て無償ボランティアでお願いできるのか、という問題はああると思う。
- 土曜日活動の主体としては、学校か地域か、といった学校教育サイドと社会教育サイドとで、まず大きくりにできるのではないだろうか。そこに教育委員会としてどう関わっていくのかを考えればいいのではないか。
- 様々な活動のアイデアを引き出すためにコンテスト型を実施するのはとても良い考えだと思うが、学校規模やその他の条件等で取り組みやすいところ、取り組みにくいところがあり、出来ないところにとっては辛いのではないかなとも思う。  
主体については、学校、公民館などいくつかの方向が考えられるが、広い視野でシステムづくりを考えていく必要がある。
- 社会教育と学校教育の連携がとても大切である。また、子どもの土曜日の過ごし方を考える上では、まず子どもが今どのように過ごしているのかという実態を学校が把握することが大事だと感じている。
- 学校、教員が今まで以上に、休業土曜日の過ごし方について積極的に関わっていく方向での議論が必要であると思う。休業土曜日の学習活動の部分については主に学校が、体験活動については主に家庭・地域が主体的に取り組む、と大きく区分できると思う。しかしそれは完全に分けられるものではなく、必ず全体的に総括していく組織が必要となる。そうでないと双方が全く別々に進み、バランスを欠いたり互いの人的な互換性がない等の問題が出る恐れがある。
- 押さえるべき観点の1つとして、障害のある子どもたちが地域でどれだけ友達が欲しい、みんなと一緒に遊びたいと思っているかも考えていただきたい。地域の中で友達づくりができるような観点を、土曜日の有効活用の考え方の中に加えていただきたい。
- 土曜日の有効に係る教職員の勤務条件整備の1つとして、府教委による教職員の勤務時間に関する規則の一部改正により、週休日の振替日の幅が広がった。こうした点も踏まえて、教職員による土曜日活用の在り方について、今後、議論していけばよいのではないかと思う。

## 【今回の議論】

従来から、様々な形で土曜日等の休業日の過ごし方については努力して取り組まれてきた。しかし、その努力に見合うだけの成果が上げられてきたのかどうか。改めて土曜日における取組の全体像を見直す必要がある。

今回の政策研究会の議論で、学習的活動まで踏み込んで土曜日の活用方策を考えるべき、

という意見が出された。例示として案も出していただいた。ただ、実施するためにはさらに具体的な中身を議論していかななくてはならない。

そこに必要となる「人材」については、勤務時間の振替が可能になったことにより教員を活用するための条件が整備された。また、教育活動・学習的活動だけで捉えると、現役・退職教員等に範囲を限定してしまいかねないため、高校生等若い世代の活用についても考えられるような活動を実施すべきという意見が出された。

さらに、それぞれの現場がアイデアを練り、地域の実態にあった活動をすべきという意見も出された。特に学校の児童生徒の学力充実という観点からは、その実態を踏まえた様々なアイデアが出されることも期待できる。

具体的な事業実施段階では、学校教育と社会教育の更なる連携の下に、再度学校中心でいくのか、コミュニティ型で相談して進めていくのか等、地域の実態に合わせて考えていくべきではないかという意見も出された。

#### 《用語解説》

- ・ コミュニティ・スクール・・・平成16年9月から導入された、保護者や地域の声を学校運営に直接反映させ、保護者・地域・学校・教育委員会が一体となってより良い学校を作り上げていくことを目指す制度。